

## 秋田県・伝統商家の街並みを残す横手市増田町

～景観より「内蔵」に注目～

日本不動産研究所 秋田支所  
不動産鑑定士 國松 了

秋田県内には、角館の武家屋敷、大曲の花火、男鹿半島や田沢湖の景観、ナマハゲやカマクラといった珍しい風習など、全国的にも有名な観光資源が多くある。そのなかで横手市中心部から南方へ約13kmの地に、近年注目を集め始めている地区がある。横手市増田町の「中七日町通り」である。旧来からの街道筋に間口が狭く、奥行が100m余りもある短冊状の地割りが並び、江戸時代から明治、大正、昭和初期にかけて栄えた商家の街並みが現存している。

実は、この地区の本当の魅力は、街道側から眺める景観より、敷地の奥にひっそりと建つ「内蔵（ウチグラ）」にある。内蔵とは、土蔵を鞘（サヤ）と呼ばれる上屋で覆った構造であり、家財を雪害から守るための知恵である。このような構造の蔵は雪国に多く見られるというが、増田の内蔵が特に注目を集めるのは、約400mの通り沿いに、現在確認されているもので45の内蔵が集まっており、これほどの数の内蔵が一つの地区に集中しているのは全国的にもたいへん珍しいという。

これら内蔵の中には、深みのある光沢を放つ黒漆喰や重厚な扉、厚く漆塗りされた柱、梁、床、趣向を凝らした細部の装飾、現在では手に入らない貴重な銘木など、当時の豪商が贅を尽くした造りのものが多く、往時の隆盛が偲ばれる。まさに、重厚、荘厳、豪華といった言葉がぴったりとあてはまる建造物で、一見の価値がある。また、内部に床の間を配した「座敷蔵」が多く、内蔵がここに住む人々の生活に密接に関わってきたことが窺えるとともに、古くからこの地に伝わる名家の歴史を感じさせる。

増田町は、江戸時代から葉たばこ、生糸の集散地として栄え、明治期には、北都銀行の前身となる増田銀行もこの地に起こるなど、県南屈指のにぎわいを誇っていたと伝えられる。今も、毎月2、5、9のつく日には、朝市が行われているが、この朝市も1643年（寛永20年）に始まり、守り続けられてきた町の歴史のひとつである。

内蔵の存在が広く知れ渡るようになってまだ10年程度だという。平成20（'08）年に本格的な「歴史的建造物調査事業」が行われ、初めてこの地区の実態が明らかになった。これらの内蔵は、家長及びその子弟のみが、長い歴史の中で大切に守り伝えられてきたもので、鞘に覆われた構造ゆえに、隣家の者でさえその存在を知らなかったという例が多くあるという。自慢話を慎む秋田県人の奥ゆかしさがうかがわれるエピソードと言えるだろう。

これら内蔵の多くは、現在も住宅や店舗として利用されているが、このうち14軒の内蔵

が住民の協力により、一般公開されている。

横手市では、平成25(’13)年、増田の街並みを重要伝統的建造物群保存地区に選定されるように、文化庁に申請する方針。これが認められると、武家屋敷で有名な「角館」について、県内2例目の保存地区選定となる。

また、毎年「蔵の日」には、通りを歩行者専用道路にして、コンサートや各種イベントも行われている。市では、歴史的な街並みを切り口に、通年にわたる観光客の呼び込みにつなげたいとしている。

おりしも平成25(’13)年秋には、JR各社と地元自治体が協力し、地域の魅力をPRするデスティネーションキャンペーンが秋田県内で行われる。写真では伝わらない質感や、古い建物の中に感じられる空気感など、ぜひ実際に現地を訪れて感じてほしい。深い感動が得られるに違いない。



「佐藤養助漆蔵資料館：内蔵の入口」



「佐藤養助漆蔵資料館：トオリ  
(店舗から奥へ抜ける通路)」



「山吉肥料店：外観」



「山吉肥料店：五重鍵形構造の内蔵の扉」



「床の間を配した佐藤又六家の座敷蔵」



「堅牢な造りの佐藤三十郎家の座敷蔵」